

あしたあめでも

じとっ、と小雨が降ってる。

「雨だねえー」

「雨だよあー」

じとじとっ、とした中。体育館の張り出した屋根の下で。

「今日も雨だねえー」

「今日も雨だよあー」

じとじとじと、っとしながらひとりごと言ってる

あたしに、莉奈が応えてる。

「明日も雨かなあー」

「明日も雨だよあー」

「じとじとじとじとじとじとじと」

あゝっ、もう、うっとうしいっ!!

「誰よ? いま口で言ったのはっ!!」

頭を上げたら、丸っこい顔があった。

「あつたし」

なんだ、志穂じゃない。いつの間に帰ってきたんだろ。

「で。どうだった? 体育館、借りれた?」

「だめだめだめ! みんな先に取られちゃったよ」

軽〜く言ってくれるなあ。あたしは、莉奈と顔見合わせてため息ついちゃったよ。

「はあ。ま、みんな大会が近いもんね。バスケットに、バレーに」

お互い場所がないときはゆずってるんだけど、こっちは重なっちゃあねえ。はあ、ドロぐちゃなグラウンドでまた練習かあ

「おっきなテルテルボーズでも作るっかあ?」

志穂がそう言ったとたん、莉奈とふたりして思わずじっとその顔見ちゃった。さすがに、口には

出さないけどさ。

3 あしたあめでも

「? あっ! いまいま、あたしがぶら下がればいい、なんて思ったんでしょ!」

「やっぱ、バレるか。」

苦笑いしてる莉奈に、志穂が両腕回しながら向かって行ってる。やれやれ。

でも、ま、あたしたちは、まだぶざけ合えるだけまじだよな。

ちらつと目を反対側に移すと、ちょっと離れたところに、弓子先輩が座ってる。ぽつと、グラウンドのほう見ながら。

「な〜んで、晴れないんだろなあ」

「ぼそつ、て声に力がないよ。こつちはそろそろ、まじいかも。しょうがない、奥の手いくか。」

「あたし、ちよつと訊いてくるわ」

「へ??」

固まってる志穂たち置いて、あたしは雨の中を校舎に走ってった。

小雨の降る放課後、わたしは目の前に神経を集中していた。

ガスバーナーの火を調節して、ガラス管の先を回しながらゆつくりかざして やがて淡いオレンジ色が濃くなって、回すのが緩くなるたびにふにやふにやしてる。うん、そろそろね。

入り口を口に当てて、息を送ってゆく。そおつと、そおつと うん、ふくらんできたわ。

丸フラスコは一気にふくらませなくちゃね。じゃ、火からおろして、せえ、のお

「ほのか、いる!」

大きく息を吸った瞬間、ガラツと理科室のとびらが開いて、聞きなれた声が聞こえてきた。 はあ、やりなおしだわ。

「なぎさ? いま実験器具作ってるから、できればあとで」

化学部のみんなが注目してる。ユリコなんか、ちょっとにらみ気味の目をしてるし。

「実験中かあ、ごめん。じゃあ、邪魔しないから、相談だけ聞いてくれる？」

いつもより強引だわ。でもドツクゾーンのことじゃないみたいだし　まあ、いいか。

わたしは手早くなぎさ引つ張って、隅の実験機に機材持つて行った。

今日はガラス細工だけだし、わたしじゃなくちゃダメ、っていうこともないし　でも、みんなチラチラこっち見てる。いくらなぎさでも、やっぱり部外者だものね。

とりあえず、またガスバーナーを調節して、ガラス管をゆっくり熱しはじめた。でもその間、なぎさはじつとわたし見ながら、ずーっと黙ったまま。変ね？

「それで？　なにか用事なんでしょ？」

ちよつとたずねてから、わたしはまたガラス管の端に口をつけた。ゆっくり息を吹き込んで、ふくらんでくるのを確認してから火からおろして。よし、こんどこそ。せえ、のあ

「ほのかさあ、天気、晴れにできない？」

パンツ!!

「うわっ！」

わたしは急いでガス栓を閉めた。机の上には、薄いガラスのかけらが一面に飛び散ってる。つい思いきり吹いちゃったじゃないの、なぎさってばっっ！

「わたしはドラえもんじゃありませんっ！」

思わず勢よく立ち上がっちゃったけど、なぎさは制服についたガラスをハンカチで落としてるだけ。

「誰もそんなこと言っていないって。たださ、最近雨続きでまともな練習ができないから。ほのかなら何かできそうな気がしたんだけど」

「やっぱり。全然わかってないんだから、もう！」

「だから！ そんなこと、できるわけないでしょ？
常識で考えてよ」

人にはできることと、できないことがあるんです
からね。

「いや、だからさ、『晴れにする』ってのは言葉のア
レで」

「それを言うなら言葉の『綾』よ！」

あ、なぎさが頬ふくらませた。

「あ〜っ！ もっ、そんな揚げ足持たなくなっ
ていいでしょ!？」

「正しく言わないなぎさが悪いんじゃない！ それ
に、揚げ足は『持つ』『んじゃなくて』取る『の!!』」

意地になっちゃってるの、自分でもわかる。けど
止まらないわ。そんな無理を友だちに言うなぎさな
んで、見たくないもの。

「ストーツプツ!!」

次の一言のためにわたしが口を開いたところで、目
の前に手のひらが出てきた。手の根元にはいつもの

メガネ。ユリコ？

「美墨さん、いまは化学部の活動中ですよ！ 邪魔
するなら出てっもらいます！ ほのかもほの

かよ。部外者引き込んでケンカなんて!!」

思いっきりの大声出してるユリコ見ながら、なぎ
さが頬をポリポリかいてる。わたしも、なんだか言
い合う気がなくなっちゃったわ。

「ごめん、ユリコ。もう邪魔しないから ね、な
ぎさ？」

「う、うん」

なぎさがまた座るのと一緒に、ユリコがわたしの
隣に座った。監視つき、か。まあ、しかたないわね。

「なぎさ、さっきの話だけだ」

「うん。要はさ、乾いた地面がほしいんだけど。
体育館はみんな使ってるし、ボール使うから校舎の
中ってわけにもいかないしで、困ってるんだ。

でさ、あたしたちの頭じゃこれ以上思いつかない
から、ほのかなら何か考えてくれるかな、って思っ

たの」

——はあ。わたしは、隣のユリコと顔見合わせ、ため息ついちゃったわ。だったらはじめからそう言えばいいのに。

でも、そうね。わたしを頼ってきてくれたのは嬉しいのだけど、ほかに乾いた地面なんて

そう思いながら、何の気なしに目が机にいった。さっきの、薄いガラスのかけらがまだ散らばってる机。ガラスがとつても薄い膜になって、虹色にキラキラ輝いてる。ん？ ちょっと待って。これは

「なぎさ。ラクロスの靴って、スパイクあるの？」

「え？ ううん、うちでスパイク使ってる子はいないよ。それが、どうしたの？」

きよとん、としているなぎさの顔に、思わず笑いがこみ上げてきちゃう。

「ユリコ。次の実験って、まだ決めてなかったわよね？」

「そうよ。なかなかいいのがなくて　って、だか

ら今日は実験器具作りしてたんじゃない」

ユリコもやっぱり、きよとん、とした顔。わたしはついつい吹き出しそうになるのをおさえた。

「うふふ。それじゃ明日、実験しましょ。なぎさたちも協力して。ね♡」

次の日もやっぱり小雨。今だったら、あたしだけで完璧に予報できるね。

授業終わりの鐘と一緒に、あたしとほのかは教室飛び出した。階段のところで手を振って別れる。ほのかは上、あたしは下へ。

だれもない部室で着替えてからしばらく待って、あたしはグラウンドに出てこうとしているユリ先輩とつかまえた。

「なぎさ、なぎさってば。どこ連れてくって？」

昨日と同じ、ちよっとぼーっとした先輩の手首つ

7 あしたあめでも

かんで、そのまま校舎へ。えーっと、たしか

「さつき言った通りですって。えーっと、たしか屋上だったっけ？」

昼休みに準備するから、放課後に来て、って言ったよね。屋上で、なにやるのか知らないけどさ。

「屋上!? ちょっとちょっと、あそこは運動部使用禁止だよ?。」

そう、それはあたしも言ったんだよね。だけど、

「大丈夫ですよ。ほのか クラスメイトの雪城さんが、そう言っていましたから」

言ったとたんに、つかんだ腕が重くなった。あれ、っと思ったら弓子先輩が、

「それってあの、化学部の子でしょ? ほんとに大丈夫かなあ?。」

なんて、あたしの目をじっと見てる。あたしは、思わず両肩つかんじやった。

「ほのかが大丈夫って言ったら、ぜえったい大丈夫。あたしが保証しますって! なんなら、たこ焼きふ

た皿賭けてもいいですよ?。」

あたしはきのう、『大丈夫』って言ったときの、ほのかの目を思い出してた。そうだよ。どんなにヤバくたって、ほのかのあの目なら間違いないもんね。

弓子先輩がちょっと下向いたと思ったら、あたしの両腕をちよいとどけた。

「——わかった。あたしが先に屋上行くから、みんなも連れてきて。」

15分以内に来なかつたら、たこ焼きおごりの刑ね」
そう言って、軽くウインクした顔、いつもの顔に戻ったみたい。

「了解っ!。」

あたしはそのまま、部室に走った。あとはお願いだよ、ほのか!

「扇風機が6台、でしょ。」

小雨の降ってる屋上のすみに張ったテント。わたしはレジャーシートの上で機材の確認しながら、カセットコンロに乗ったおなべをかき回してた。

「うーん。やつぱり、ガスがちょっとほしいわね。ユリコが帰ってきたら相談しましょ。」

化学部のみんなは機材を集めに出ちゃって、屋上にはいま、わたしだけ。わたしも行くって言ったのに、みんなして『ほのかは動いちゃダメ！』なんて言うのよね。まあ、このおなべが実験の要だから、っていうのはわかるのだけど。ちょっと、腕が疲れてきちゃったわ。

「広げる棒が10本で　あ、ユリコ」

階段のほうから、ひょいっ、と出てきたメガネの顔に、わたしは声をかけた。ユリコ、雨を手ではらないうちに、こっちに駆けてくるわ。

「ただいまあ。屋上の使用許可はとれたよ。でも、びつくりしたなあ。あの教頭が、二つ返事で許してくれるんだもんねえ。」

なんだか呆れたみたいな顔に、思わず吹き出しそうになっちゃったわ。

「そんなに、嫌いなのかな？」

御高おたか倶か女子との試合が近いって言えば、許可されるはず。そうユリコに教えたのはわたしだけ

実は、試合は来月なのよね。ふふ。

「なぎさから色々聞いてたから、ひよっとしたら、って思ったの。こたわることして、みんな違うものよね」
またちょっとだけ、笑いがこみ上げてきちゃう。ほんと、人間ってふしぎ。あら？ ユリコがなんだか複雑な顔してる？

「どうか、した？」

目をそらしたユリコの顔を覗き込もうとしたら、ぱつとこっちに振り返った。

「また、美墨さん？」

え？

「いい実験なのよ、これ。でもやつぱり、またかって思うと」

な、なに言ってるんだろね、あたし。いいや、忘れて忘れて」

手を振って、また階段の方に歩いて だめ！

「ちよつと待ってー！」

手を伸ばしても届かない。急いで立ち上がって、追いつかなきゃ あっ！

「きゃっ!!」

立ち上がろうとした瞬間、レジャーシートがすべって、そのまま、倒れるっ！

「あぶないっー！」

っと思つたら、わたしのからだ、なにかに乗った。

「ぷふう〜。 ら、らいひょうふ?」

下からつぶれた声。ゆ、ユリコ!?

「どうして?」

起き上がって、ユリコを起こしてあげる間に、わたしはそれしか言えなかった。ありがとう、とか、大丈夫、とか、いろいろ言うことはあつたはずなのに。

でも、どうして?

「あつたりまえでしょ? 友だちがケガしそうなとき、助けられない人がいる?」

まっすぐわたしの目を見て、ユリコがそう言った。

ええと、その原因を作ったのって、ユリコ ?

「化学部の他の子だつて同じよ」

わたしがちよつと頬をかいていたら、ユリコが続けた。なんだろう、って首かしげちゃつたわたしの目の前に、人さし指立てて。

「ほのかが一所懸命だから、みんな『やろう!』って気になるの。ほのかが頑張っちゃうから、よけいな仕事させないようにしたいの。ほのかは、いるだけでみんなを動かしてるんだよ。だから」

そこまで言つて、ユリコがはっ、とした顔で黙っちゃつた。

「だから?」

わたし、意地悪だわ。そうは思つたけれど、聞かなくちゃいけない。ほんとの原因は、わたしなんだ

もの。

「だから、ごめん。あたし、信じなきゃいけないんだったわ。ほのかは、ちゃんと化学部のことも考えてるって。」

うん。さっきのなし。この話、おしまい！」

ふう。一応だけど、わかってくれたみたい。わたしも、ちょっと反省しなくちゃ。

「わたしも、ごめんなさい。今後は注意するわ。」

それでね、ユリコ。扇風機が足りないから、ガスがほしいんだけど　心当たり、ある？」

レジャーシートの上で深く頭を下げたあと、わたしはすぐ、さつき気になってたことを聞いた。ちよつと無理やりかもしれないけど、引きずっていいことないものね。

「ガス、ねえ。たしか、さつき見かけたような

あ、思い出した。保健室にあったんだ」

ユリコが乗ってくれてほっとしたけど　保健室

に、ガス？　それってまさか？

「酸素はだめよ、ユリコ。火を使うから」

「いや、そういうのじゃなくて　まあいいや。ちよつと借りてくる」

ああ、また階段のほうに走って行っちゃった。入れ替わりに、他の子が戻ってきたから、追いかけることもできない。しょうがないわ。『化学部ではまず、部のことを考えて』よね、ユリコ。

「みんな、棒を持って集まってね。　さあ、実験の本番よー！」

「ねえねえねえ、なぎさ。ホントに、ほんつとに屋上なん？」

志穂が小さな声で訊いてきた。後ろをちらっと見たら、志穂も莉奈も、ほかのみんなも困った顔でまわりをちらちら見てる。

あたしたち、みくんなからジロジロ見られちゃっ

てるもんねえ。 まあ、校舎の中を、ラクロスの道具持ってぞろぞろ歩いてれば当たり前なんだけど。

「ほのかが屋上、って言ったら屋上なの。ほら！急がないと、たこ焼きおこりの刑だって！」

「それ痛いよあ。今月おこづかい少ないんだからあ」

莉奈のホントにうんざりした声に、他のみんながざわざわし始めた。

あたしは、志穂とだけ目を合わせて、ちょっとにっこりしちゃった。莉奈、ナイスマシスト

「だったら走る！それっ！」

階段駆け上がるあたしの後ろから、なんだか殺気立った足音が続いてきた。

「ちよ、待った！ストップ、ストップッツッ!!」

屋上に出る寸前、なにかにぶつかりそうになって、あたしは思わず大声出した。

足を止めたら、後ろで志穂のつぶれた声が聞こえる。けど、あたしは目の前の方に気をとられてた。

「あれ？弓子先輩??」

屋上で待ってるはずなのに、なんでとびらの前で止まってるんだろ？

「先輩、どうしたんですか？通れないから、早く屋上に」

言ってる途中で、先輩がまっすぐ前を指さした。屋上の方。あたしがそっちに目をやったら、

「なにこれ!?!」

一面、半透明の布みたいのがかぶってる。屋上の端から端まで、びっしり。真ん中らへんは、あたしの胸ぐらいまでたれさがっちゃって、めくらないと入れそうにないよ。これで、なにやれって言うの??

弓子先輩のとなりで、一緒になってぼけっ、としてたら、どこから声が聞こえてきた。

「あ、なぎさ。いらっしやい」

この声、ほのか？でも、どこから？ うわっ、

布からなにか出てきたっ!?

「ふう。ごめんね、ちょっと時間かかっちゃって。い

「まから仕上げするわね」

「そう言つて、また布の中に戻つてつた。」

「しばらくして、布の奥から、」

「みんな、いくわよ。せえ、のっ!!」

「ほのかの声と一緒に、ブーン、つていう、なにが回る音がした。それと同時に、目の前の布がだんだん持ち上がつてくよ。」

「扇風機、これで全力です」

「コンロ少しつけてみて。弱火いーっ」

「よわびい〜」

「ほのかの声に、化学部の子たちが応えてる。」

「はい、中火いーっ」

「ちゅうびい〜」

「ほのかがひとつ指示するたびに、布がまた、ちよつとずつ持ち上がつてく。そのうち、入り口近くの布は、あたしの頭を越えた。」

その瞬間、目の前に、屋上が広がつた。外は雨な

のに、全然ぬれてない、広い屋上。

「すご、すご、すごおあい！屋上がドームになつちやつた!!」

「背中で志穂が声上げた。となりの弓子先輩があたしの顔見て、うんうん、つてうなずいてる。」

「その顔見ながら、あたしはちよつとだけ、ほつとした。あたしも、ほんのちよつとだけ疑つてたのかもね。ごめん、ほのか。」

「あたしは屋上に出て、ほのかさがした。先輩より先に、あたしからお礼言いたかつたんだ。」

「でも、屋上の奥のほうで見つけたほのか、すごく困つた顔してた」

「ほのか 大丈夫？」

「あたしはほのかのそばまで駆けてつて、こつそり訊いてみた。まわりの化学部の子たちの目がちよつ

と痛いけど、今は気にしてらんないよ。いったい、なんなんだろう

「足りない」

へ？ なによ、ぼそって感じの、無愛想な声。

あ、またなんか言ってる？

「ふくらみが足りないわ」

あたしの方、ぼーっと見ながらほのかが言った。あたしの、胸のあたり。 って！

「ちよ、ちよっとほのかっ！ あんた、ひとのこと言えるの!？」

「え？ なんのこと？」

ほのかの目が、きょとん、ってなった。まさか無意識に言ったの？

「だから ふくらみ、って」

あたしが言ったとたん、ほのかの顔が真っ赤になっ、

「なんの話よ！ わたしは、この膜が十分ふくらんでない、って言ってるの!!」

一瞬、耳がキーンとなった。ったく、どなんなくたっていいじゃない って、なんだか背中が寒いな。そーっと後ろ見たら、うあ！ みんなの視線が、あたしたちに集まっている!？」

「なぎさ、ちよっとこっち来て!!」

ほのかに引つ張られて、あたしたちは屋上の隅に寄った。

まだ背中の寒気は続いているなあ。化学部の部活中に行くときよくこうなるんだけど、でも、今日はちよっと違う感じ。そっか、あの、メガネの子がいないんだ。

階段の方からは、ラクロス部のみんなが上がってきて、軽く走ったり、柔軟したり。中にはクロスを軽く振って うわっ！ あっぶない、もうちよっとで天井突き破るところだよ。

「ね。ラクロスには、低すぎるでしょ？」

あたしの顔をじっと見ながら、ほのかが言った。さっきと同じ、困った顔で。

「もちよつと、ふくらませ」
 あたしは言いかけて、はつとした。そうだよ、それができるなら、困った顔なんてしてるわけないじゃない。

なんて声かけたらいいか迷つてたら、ほのかが目を下げたり上げたりしながら口ひらいて、

「要はね、熱気球なのよ。バーナーの代わりにコンロと扇風機つかつて、でも、理科室の機材だと、普通のピニールしか作れないから。これ以上温度上げたら、膜がとけちゃうわ」

それだけ言つてから、そのまま目線を落としちゃつた。

あたしはまた、天井を見てみた。ほのかにとつては『普通の』かもしれないけど、あたしにはまだ信じられないくらい。広い屋上に、化学部だけの力で天井作つちやつたんだもん。

いいよ、つて言つてあげたいんだ。これで十分だよ、ありがとつ、つて言いたいんだよ。でも、い

まのあたしは、ラクロス部のなぎさなんだ。練習できるから、つてみんな引き連れて来ちゃつて、そうは言えないよ。

——しょうがない、か。せいぜい化学部に迷惑がかんないように、あたしがバ力になつて

「いいじゃん。これ！」

へ？ あたしたちが思わず顔を上げたら、そこに弓子先輩が立つてた。ニコニコ顔で。

「低いパス、なぎさ苦手だつたよね？ これなら誰もヘッドアップできないし、練習にもつてこいじゃん」

あたしは返事できなかった。ほのかの目は、先輩とあたしの顔を行ったり来たりしてる。

「い、いいんですか？ これで??」

目をまんまるにしたほのかの肩、先輩がたたいた。

「ありがと、雪城さん。使えるよ、これは」

ちよつとだけ笑つてくれたほのか見ながら、あたしは見えないように息をついた。

「すみません、弓子先輩」

ほのかから離れて、みんなのところに戻る途中、あたしは頭を下げた。

その頭に、コツン、とひとつ軽いげんこつ。

「ほら、頭上げる！ そんなことしたら、また心配かけちゃうよ。」

感謝の気持ちなら、練習で見せてもらおうじゃないの。」

にやって笑ういつもの顔が、あたしには見えた。顔あげなくても、頭の中に見えた。

「ヤバイヤバイ、ヤバイよあ〜」

人の少ない1階の廊下を、あたしは走ってた。

なぎさがほのかちゃんとこ駆けてったから、今のうちに、ってトイレ行っただけ。どこもいっぱい、1階まで降りなきゃなんないんだもんなあ。声

かけたのって莉奈にだけだし、ああ、これじゃ練習始まっちゃうよあ。

階段はその角を曲がったとこ。よおし、準備運動代わりに、くるっと回って勢いつけてそのまま

つて、いいっ!?

「ちよつとちよつとちよつと！ どいてええっ!!」

廊下の角の向こう側、鉄のかたまり抱えたメガネの子が、びっくりした目でこつち見てる。あたしはからだひねってなんとか避けたけど、そのまま階段に、ぶつかるっ!!

「ぶぎゅっ!？」

つて、あれれ？ なんか、やわらかい。ああっ、

いまの子つぶしちゃった！

「ど、どどどーして？ たしかに避けたのに!!」

ぱっ、とどいて、その子ひっぱり上げた。あ、この子って、化学部でいつもほのかちゃんと一緒にいる子じゃない。え〜と、たしか

「ユリコ そうそうそう！ ユリコちゃんでしょ。」

化学部の」

「 ったた。ついクセで、からだか動いちゃったわ
 ああ、やっぱり。あたしが倒れるとこの下に、も
 くりこんで来たんだ。」

「ごめんねごめんね。ありがと、ユリコちゃん♡」

ユリコちゃん、きよとん、とした目であたし見てる。
 「別に、助けたってわけじゃ。そもそもは、廊下
 を走る久保田さんが悪いんですからね。なんであた
 しが」

ぶつぶつ言ってるけど、ほつべたが赤くなってる
 よ。うん。なぎさの気持ち、ちょっとわかる気がする
 な。

「ねえねえねえ、屋上行くんでしょ？ いっしょ行か
 ない？」

細い電柱くらいある鉄の容器かかえて、階段上る
 うとしてユリコちゃんにそう言ったら、なんだか
 むくれた顔になったよ。そっか、あたしも部外者だ
 もんね。

「えへへへ。あたし、ちょっとトイレ探すの手間取っ
 ちゃってさ。ユリコちゃん手伝ってた、ってことな
 ら、ちょうどいい理由になるんだけどな」

あたしが苦笑いしながらそう言ったら、ユリコちゃ
 んがため息ついて、しょうがないな、って顔した。

「よおし、屋上向けて、れつっこーっ！」

そうは言ったものの、重いなあ、これ。ガスボン
 べなのはわかるんだけどさあ。

タイミング合わせて、一段づつ上ってく。ボンベ
 の向こう側は真剣な顔だあ。でも、こーゆーのって、
 だまつると辛くなるだけなんだけどな。

「でもでもでも、化学部すごいよね。あんなの作っ
 ちゃうんだもん」

「ほのかが頑張ってるからよ。ウチはほのかで持っ
 てるようなものだから」

ちょっと話しかけたら、むすつとした声が返ってき
 たよ。でも へへ、やっぱ聞いている通りの子だ

「そおお？ なぎさから聞いてるよ。ユリコって子が、化学部のことすごく大事にしてるんだって。

ノリすぎたら怒ってくれるあの子がいるから、なぎさは気軽にほのかちゃんのとこ行けるんだ、ってさ」

ボンベの向こう、ちらつと見てみた。ユリコちゃんの目、メガネから飛び出ちゃつくくらいになってる。

「うそ。美墨さんが、そんなこと」

びっくりしてる、びっくりしてる。そうだよ、ね

なぎさってば遠慮しないから、邪魔してるように見られちゃうもん。

「なぎさがね、前にあたしに相談に来たんだよ。『あたし、友だち取り上げちゃってるのかな』って」

ユリコちゃんが下向いちゃった。信じられないかな？ なぎさも、付き合わないとわかんない子だもんね。

あたしは階段ちよつとおりて、腰かけながら見上げてみた。下向いてるユリコちゃん、困った顔じゃないよ。なんだかぼーっと、考えてる顔。

「なぎさってさ、カラッとしてるように見えるけど、実は心配性なんだよね。化学部でのほのかちゃんの立場とか、自分が嫌われることとか、心配でしょうがないんだよ。ホントはさ」

ぼーっとした顔を見ながらそう言っつて、あたしは黙った。

なぎさはユリコちゃんのこと、もひとつ言っただんだ。うん、なぎさは正しいよ。わたしも、なぎさと同じ感じ受けたもん。きつと、この子なら

そう考えてる途中で、ユリコちゃんの目が光った。顔がにやつ、つて感じになる。ほおら、きた！

「ねえ、久保田さん、ちよつとノらない？」

そうそう。なぎさ言っつてもんね。『ホントはあの子、すっごいいたずら好きだと思っつな』って。

「このガスって、実はさあ——」

ユリコちゃんの話ききながら、口が勝手に、にまーっとしてくの、自分でもわかった。

「ねえ、ほのか。これって 失敗なの?」

「え?」

ラクロス部が柔軟を終わったころ、テントの中で結果をまとめてるわたしに、声がかかった。

顔を上げたら、化学部のみんなが、わたしを囲んでる。

「すみっこの方で、美墨さんと話してたでしょ。これじゃ、だめみたいなこと」

「 ううん、そんなことないわ。ラクロス部の部長さんも、これでいい、って言うって 」

ひゃっ! っていう声がして、みんなが一斉にそっちを見た。上がったボールを取ろうとして、クロスで天井引つ掛けちゃうとこだったんだ。

ああ、みんなの顔が曇ってくわ。

「か、化学部の力だけで、ビニール合成して、膜にして、屋上まるごと覆っちゃったのよ? 大成功

じゃ
」

うわっ! って声でまたみんな振り向いた。ラクロス部の人たち、みんな天井気にしちゃってて、お互いぶつかりそうになってるんだわ。

「ほのか
」

遠くで、なぎさたちも心配そうな顔しているわ。ああ、だめよ。こんな顔しちゃいけない、って思うのに。これじゃ笑えない、わよ

「おい、なにやってんのよあ!」

「どいてどいてどいて〜っ!」

みんなになんて声かけたらいいか考えていたら、いきなり大きな声が飛び込んできた。顔を上げたら、目の前に鉄の容器。その影から出てきたのは ユリコに、志穂ちゃん?

「うちは薄情よねえ、まったく。だけれども手伝ってくれないんだから。久保田さんに会わなかったら、どうなってたか」

「えへへ。まだ始まりそうになかったんで、ちよつとトイレ行ってきたら、ユリコちゃん困ってたからさ、いっしょに持ってきたん」

ユリコがラクロス部の人に手伝ってもらうなんて珍しいわ。だけど

「もってきたって、それ？」

「そう。ガスボンベ」

ユリコを疑うわけじゃないんだけど、気がついたらわたしは口に出していた。

「酸素じゃないわよね？」

「大丈夫よお。窒素なんとか、って書いてあるから」

「チツ素って、燃えなくて安全なんですよ。あたしだって、そのくらいわかるんだから」

ユリコと志穂ちゃん、ふたりで顔見合わせて、笑ってるわ。そうね。密室じゃないんだし、窒素なら

うん、これで一気にふくらませられる！

「助かったわ。ありがとう、志穂ちゃん、ユリコ。それじゃ、みんな離れて」

わたしがふたりに頭を下げるのと同時に、志穂ちゃんが叫んだ。

「ちよつとちよつとちよつとあゝ！ラクロス部う、練習ちゆうだゝん!!」

そのとたん、なぎさがこつちに飛んできたわ。わたしは簡単に説明して、ラクロス部の人たちをこつちに集めてもらうことにした。

「ほのかのすることは信じてるけど　だいじょぶだよな？」

なぎさがこつそりそう訊いてきたのには、笑ってしまっただけ。

「毒じゃないけど、濃すぎるのを吸うと息が苦しくなるはずだから。屋上中に薄まれば問題ないわ」

とりあえず納得して、走っていくなぎさの後姿を見ながら、わたしはついに吹き出しちゃった。それはね、信じてない、っていうのよ。なぎさ。

「それじゃ、いつくよあ〜」

化学部とフクロ口ス部の全員が見守る中、なぜかユリコと志穂ちゃんがボンベの脇に陣取ってにやにやしてる。気があつたのかしら？

「さん！ にい！ いちっ！ はっしゅっ!!」

志穂ちゃんが手を振り上げるのと同時に、シューッ、っていう音が、あたりに響いた。わたしは、ビニールの天井と、手すりの部分を交互に確認した。

うん。少しづつ、少しづつ、持ち上がってるわ。

シューッ、っていう音が続いている。勢いはまったく変わらない。さっきまで、ちよつとへこんでいた天井も、だんだんふくらんできてる。

なぎさがクロスをひよい、つと振ったけど、天井まではクロス半分遠い。そのまま、わたしに親指立てて合図してくれた。うん。これなら、本当にドームにできるかも

あ、あら？ なんだか、ぼあつとして、顔が勝手にほころんでいくわ。変ね？

まわりを見たら、なぎさも莉奈ちゃんもにやっ、つとしてた。ユリコと志穂ちゃんは最初からだけど。すこしづつ、ビニールの天井が持ち上がっていくにつれて、みんながにやー、って

「ちよつとユリコ。これ、ほんとに窒素？」

「ん〜とね、エヌツーオーって書いてあるよあ」

N_2O ? ええと、酸化　いいえ、亜酸化、窒素。

つて、ちよつとまつて!?

「ユリコ、ストップ！ これって笑気　笑いガスよ！」

とつさにハンカチで口と鼻を押さえて、ボンベに走り寄ったわたしを、ユリコが止めた。はつとして見上げたら、ハンカチで口元おさえながら、首を横に振ってる。　わざとね、ユリコ！

「みんなみんなみんなっ！ すこいドームを作ってくれた化学部を代表してえ、ほのかちゃんを、胸上

げっ!!」

な、なに!? 志穂ちゃんの呼びかけに、ラクロス部の人たちが反応してる? わたしを取り囲んで

ああ、ほんとに胸上げになっちゃったわ。

そっか。笑気ガスって、ちょっととした催眠効果があるのだったわ。 はあ、しょうがないわ。さめるまで胸上げしてもらうのが一番平和ね。

「化学部、ちゅうもーく! 大実験に協力してくれ

たラクロス部を代表してえ、美墨さんにい みんなでキスしちゃえっ!!」

ええっ! ユリコ!?

わたしは『ごめんなさい』って言いながら手足じたばたさせて、手の波から出ようとしたり。ああ、あと1mがこんなに遠いなんてっ!

「そお、れっ!」

「うひゃあっ!」

なぎさの声!! うん、もうなりふり構ってられないわ。わたしは両足を全力で蹴り出すと、ちよっ

とだけ開いた隙間に向かって飛び込んだ。

「なぎさっ!」

化学部のみんなのまん中で、なぎさがぼーっとしてる。わたしはその中に突っ込んで、両手を開いた。

「みんな、目を覚ましてっ!!」

ああ、みんなの後ろから、ラクロス部の人たちがせまって来てる。わたしひとりじゃ、どうにも

っ!!

「はいはいはい、そこまでえ!」

え? 志穂ちゃんの声が出た、と思ったら、みんなが笑いながら立ち上がって、あちこち散っていくわ。

「これって?」

なぎさの顔をちらちら確認しながら、まわりを見てたら、

「ごめんね、ちよっと、やりすぎたみたい」

志穂ちゃんの声が、上から聞こえてきた。

「笑気ガスは最初の1分だけ。あと出したのはただの窒素ガスよ」

反対側から、ユリコの声。ただの窒素？ それじやあ

「そつそつそつ、さつき集まったときにね、みんなに話したんだよ。感謝のしるしを、ふたりに贈ろう、ってさ」

「口で言うのって、テレくさいじゃない？ だから」
ふたりがクスクス笑いながら話してるの聞いてたら、だんだん頭が痛くなってきたわ。要するに、わたしたちはただのダシ、なわけ？

「あたしたちはあ、きっかけつくっただけ。いいアイデアでしょ♡」
わたしが両手振り上げたら、ふたりとも急いで逃げちゃった。もう、怒ってもいいけど　ふう、なんだか疲れちゃったわ。

トン、って背中が重くなって、振り向いたらなぎさがわたしに寄りかかっていた。頬や首のあたり、キスマークでいっぱいになりながら、眠っているわ。は

じめに近くにいたから、笑気を多く吸っちゃったのかもね。

頭の上の髪どめをちよつとはずすと、栗色の髪がわたしの腕に当たる。痛んじやって硬すぎなんてよくボヤいてるけど、指ですくと気持ちいいのよね。

「ラクロス部を代表してえ、美墨さんに、キスしちゃえー」

寝顔を見ながら髪をなでてたら、なんとなく、さつきユリコが言った言葉が口からこぼれてきた。

——わたしも化学部員、よね？

「はーい♡」

目が覚めたら、ちよつど練習が終わるところだった。あゝあ、一日サボっちゃったよ。

でも、みんなは別に嫌な顔もしてないし　それに、化学部の子たちと一緒にあって、クロスの振り方

教えてたり、おしゃべりしたりしてる。なんなんだろ？——ま、仲良くできるのはいいことだけだね。

ほのかは化学部のテントで、なにか書いてるみたい。実験のまとめかな？ 成功してよかったよね。

化学部っていえば、寝る前になんかあったんだよね。志穂がガス出して、化学部の子に囲まれて

あれ？ なにかされたよつな気がするけど、なんだったっけ??

なんか最後に、ほのかの顔がすぐ近くにあったよつな気もするなあ

「よっ！ なぎさ、起きた？」

いきなり背中叩かれて、振り向いたら、弓子先輩がいた。

「今日はくろろつさま。おかげで、いい練習になったよ」

ん?? なんのことだろ？ 練習もしないで寝てたのに、くろろつさま、って??

「いやー、楽しかったねえ。またあした、雨でもいかもね」

先輩のニヤニヤ笑い見てたら、なんとなく冷や汗出てきた。思わず見上げた天井に、雨の影がばらばら見える。

あたしは、思わずつぶやいた。

「ああ、なぐんで、晴れないんだろなあ」

—おしまい—